

2014年11月16日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 20 章 9～18 節

説教：そんなことがあってはなりません

## 1 たとえ話

### 1) 登場人物

今日の箇所、イエスは人々にたとえ話を語っています。たとえ話というのですから、登場人物は実際にいる人たちをほのめかしています。いったい誰のことであるのかは、聞く者が考えなければなりません。

結論を先に言っておきます。ぶどう園の主人とは、イスラエルの唯一の神、父なる神のことです。主人の下からたびたび派遣されたしもべたちとは、旧約に登場してくる預言者たちのことです。ぶどう園とは、神が与えてくださった約束の地イスラエル、あるいはもっと狭くとらえれば神殿が建てられているエルサレムを指していると考えて良いでしょう。そうしますと、主人の愛する息子とは誰のことなのか。ぴんと来るでしょう。このたとえ話を語っておられるイエスです。

### 2) 農夫たちとはだれのことか

では農夫たちとは誰のことか。実はこれが、このたとえ話を理解しようとするときの大きなポイントとなります。イエスは、農夫とは誰のことか、そのことを問いかけるためにこのたとえ話を語ったと言っても良いくらいです。今日は読みませんでした。19 節を見ると、おもしろいことに律法学者や祭司長たちは、たとえ話の農夫とは自分たちのことだとすぐに気づいたようです。どうして気がついたか。

農夫たちはたびたび主人から送られてきたしもべを袋だだきに、恥をかかせ、追い

返しました。誰か聞いても「何とひどいことをするのか」と思うはず。ですから、たとえ話の農夫は自分のことではなくて、別の誰かのこと。そんなふうにとめるのが普通でしょう。

皆さんもそうだと思います。教会に来て、「あなたは罪人です」と初めて聞かされたときどう思っていましたか。「私は良い人間ではないかもしれないが、警察につかまるような悪いことはしていない。」そう思って反発した方もいるでしょう。

このたとえ話も同じです。「農夫は自分のことではない」、そう思うのが自然です。ところが、律法学者や祭司長たちはこれを聞いて、自分たちのことであるとすぐにわかりました。理由は 15 節にあります。「彼をぶどう園の外に追い出して、殺してしまった。」律法学者や祭司長たちは、イエスを殺そうとしています。今始まったことではありません。11 章 53 節の時点からすでにイエス殺害計画がスタートしていました。皮肉なことですが、「殺す」ということばから、律法学者たちはこのたとえ話が自分たちのことを指しているとすぐに理解しました。

たとえ話の農夫。あれは律法学者や祭司長たちのこと。問題はこれで解決、と言いたい所ですがほんとうにそうでしょうか。ほかに可能性はないのでしょうか。そのことを次に見て参ります。

## 2 「そんなことがあってはなりません」

### 1) 理由 1 ダニエル書 2 章 44 節

たとえ話を聞いていた民衆に目を留めません。彼らはこのように言いました。16節。「そんなことがあってはなりません。」そんなこととは、何のことか。二つのことが考えられます。

一つ目は、すぐひとつまえのことばです。16節。「彼は戻って来て、この農夫どもを打ち滅ぼし、ぶどう園をほかの人たちに与えてしまいます。」言い換えれば、イスラエルは外国の手に渡されてしまいますということになります。それを聞いた民衆が声を合わせて、「そんなことがあってはなりません」と言った、そのようにとるのが最も自然で、無理がありません。

国を愛する心からこう言ったのかと思うかもしれませんが、そうではありません。人々はイエスが語るたとえ話を聞いたとき、ダニエル書のみことばを思い出したのです。ダニエルは紀元前六百年頃に活躍した預言者です。若いときに無理矢理に外国に連れて行かれ、外国の王であるナブカデネザルに仕えました。あるときその王が夢を見ます。ところが夢の意味がわからず不安になり、そこでダニエルが呼ばれその夢を解き明かしていく。その場面のなかで語られたのが、ダニエル書2章44節です。「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅します。しかし、この国は永遠に立ち続けます。」

「その国はほかの民に渡されない。」人々はダニエルの預言のことばを信じています。それなのにイエスは、「ぶどう園をほかの人たちに与えてしまう」と語ったのですから、思わず「そんなことがあってはなりません」

と反論した。それが一つ目の理由です。

## 2) 理由2

これだけで十分説明がつかますが、別の理由も考えられます。15節です。「彼をぶどう園の外に追い出して、殺してしまった。」財産を横取りするためにあととり息子を殺すなど、とんでもない話だ、そんなことがあってはなりません。そのようにもとらえることができます。

聖書は巧妙に書かれています。今二つの理由を挙げましたが、どちらともとれるように、あえてあいまいに書いているように思います。そんなことどちらでも良いではないか。と思うかもしれませんが、17、18節のことを考えるときに大に関係していきます。

## 3) イエスは見つめられた

17節に「イエスは、彼らを見つめて言われた」とあります。イエスが誰かの顔を見つめるのはかなり特別なことです。一番良い例がペテロでしょう。22章60、61節です。「しかしペテロは、「あなたの言うことは私にはわかりません」と言った。それとついでに、彼がまだ言い終えないうちに、鶏が鳴いた。主が振り向いてペテロを見つめられた。」

ついさっきまで、ペテロは死んでもイエスについていきますと、自信満々に言い張っていました。そんなペテロに対しイエスは、「きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、私を知らないと言います」と忠告しました。口ではすばらしいことを言っておきながら、いざ自分のいのちが危なくなると、とつぎに正反対のことを言います。そうやってイエスを裏切っていく。イエスはそのようなペテロを見つめていました。

民衆は、「そんなことがあつてはなりません」と言っています。この人たちは、「イエスはイスラエルの希望の星だ。必ずこの国を救い、自分たちを幸せにしてくれる」そう言って喜んでいきます。けれども、このあとどうなっていましたか。イエスを見捨てていきます。イエスを十字架につけると、声を張り上げていく。イエスは、人々がイエスを見捨てていく姿を見つめておられます。

たとえ話の農夫とは誰のことか。律法学者や祭司長だけではありません。イエスの周りに集まっているすべての人のことを指しています。そしてそれは、もしかして私たちのことかもしれません。

### 3 礎の石となられるイエス

#### 1) 見捨てた石 (詩篇 118 篇 22 節)

イエスは、17 節でこう言います。「『家を建てる者たちの見捨てた石、それが礎の石となった。』と書いてあるのは、何のことでしょう。」

イエスは、詩篇 118 篇 22 節のみことばを引用し、そのあと続けて、石の上に人が落ちていくことと、反対に石が人の上に落ちることを語っています。いずれも石にぶつかった者が粉々に砕ける様子では同じです。それは何となくわかるのですが、いったい何を言いたいのか、すぐにはわかりません。

ヒントは意外な所にあります。イエスがろばの子に乗ってエルサレムに向かわれた所です。人々は道に自分たちの上着を敷き王となられる方を迎えました。弟子たちはこう叫びました。19 章 38 節。「祝福あれ。主の御名によって来られる王に。」実はこれも詩篇 118 篇 26 節のことばでした。偶然でしょうか。聖書に偶然はありません。何かの意味が

あるはずです。

人々はイエスがイスラエルの王となることを期待し、喜んで迎えました。王となる方が殺されるなど、そんなことがあつてはならない。そう固く信じています。でもその後どうなったのでしょうか。人々は律法学者、祭司長たちに扇動されてイエスを見捨てていきます。家を建てる者たちの見捨てた石。その石とは、イエスのことです。けれどもその捨てられたイエスが、神の国を打ち立てていく礎となっていく。それが神の救いの方法でした。

#### 2) 人が石の上に落ちれば、だれでも粉々に砕ける

では、人が石の上に落ちて粉々に砕けるとは、どんな意味でしょう。イエスの周りに群がっている人たちのことを見るとわかります。最初彼らは、イエスを喜んで迎えました。けれども、やがて手のひらを返すようにしてイエスを見捨て、十字架にかけて殺してしまいます。石であるイエスの前では、罪を抱えている人間の本性が全部明らかになりました。それが粉々に砕けるという意味です。

#### 3) 石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛び散らす

では反対に、石が人の上に落ちるとは何でしょう。たとえ話の最後に、「この農夫どもを打ち滅ぼす」とあるので、神がさばきをされる。さばきことを「石が人の上に落ちる」と考えてみたらどうなるでしょう。人々は、神の愛するひとり子であるイエスを殺しました。たとえ話によれば、ぶどう園の主人である父なる神はさばくことになっています。いったい、だれをさばきましたか。人々をさ

ばきましたか。いいえ、主ご自身が代わりにさばかれました。

ということは、さばきの石は誰の上に落ちたのか。私たちの上には落ちませんでした。主ご自身の上に落ちました。主は、粉みじんに砕かれ、死なれました。そのようにして、見捨てられた石が、礎の石となりました。

私たちは何者なのでしょう。人は、あなたはすばらしいと言ってくれたかもしれませんが。自分で自分のことを悪い人間ではないと思っていたかもしれませんが。けれども神の前では、誰もが神を殺してしまうような罪人なのです。認めてくれないでしょうか。認めてしまったら、神のさばきを受けるから怖いと思うでしょうか。

恐れることはありません。認めて良いのです。なぜなら、この方がすでにさばきを受けてくださったからです。完全なさばきです。さばかれることはもう二度とありません。ですから、「私は石を見捨てた者です」と告白し、私たちの礎の石となられた方のところに向かいたいと願います。